

佐藤文香

『軍事組織とジェンダー 自衛隊の女性たち』

(2004 慶應義塾大学出版会 478 P 4,000+税)



加 納 実紀代

防衛大学校出身の元航空自衛隊二等空尉・岬美由紀が大活躍する「千里眼」シリーズ（松岡圭祐作）をご存じだろうか。彼女はカルト集団のテロを阻止するやら中国の反日暴動の渦中に身を投じるやら……。かと思えばなんとイラクに出動して日本人人質を解放し、ブッシュ大統領の裏をかくイラク戦争を終結に導いたりもするのだ。

広告にある「シリーズ400万部突破」はオーバーだとしても、こうした「戦うヒロイン」が一定の読者を得ていることはたしかだろう。その背景にはおそらく、女性自衛官が東チモールやイラクに出動し、存在感を高めているという現実があるだろう。この15年で、日本もずいぶん遠くまできたものだ。

15年前、湾岸戦争への派遣米軍50万のなかに3万余の女性兵士がいると知ったときは仰天した。さらに驚いたのは、アメリカ最大の女性団体NOW（全米女性機構）が、彼女たちの活動が後方支援に限られていることを女性差別として、戦闘部署への参加を要求したことだ。社会のあらゆる領域への平等参加という理念に加えて、昇進などにおける不利益等が理由だった。日本のフェミニストの多くはこれに批判的だったが、以後アメリカの軍隊では地上戦の一部を除き戦闘部署がづいづい女性に開放されていった。

それを如実に見せつけたのが、ハリウッド映画「G. I. ジェーン」（1997年）である。ヒロインのオニール大尉は、男でも60%は脱落するという厳しい訓練を耐え抜き、ついには危険を冒して男性上官を救出する。これがフェミニズムのゴールなのかと暗然としたとき、「G. I. ジェーンはフェミニストではない」という主張をかかげて登場したのが、本書の著者佐藤文香である。女であることを思い知らせるべく、男性チーフから凄惨なリンチをうけたオニールが血みどろの姿で立ち上がり、“Suck my dick!”と叫ぶシーンをとらえて、もはやオニールは女ではなく「男」なのだ」と著者はいう。そしてアメリカにおける軍隊と女性をめぐる言説を分析し、性差認識と平等への志向、軍事化への態度を軸とする3次元マトリックスにまとめてみせた（「アメリカ女性兵士をめぐる言説の分析 — 「G. I. ジェーン」か

ら見えてくるもの（世界で今、女たちは）」『女性学年報』19号（1998年）。

この論文はグローバル化時代の新しいタイプの学者の登場を印象づけた。しかしわたしのような「古い」人間は3次元マトリックスに頭クラクラ、その才気にいささか鼻白む思いもなかった。しかし著者は、たんなる「アメリカ帰りの才女」ではなかった。以後彼女は、わが日本国の「軍隊」・自衛隊のジェンダー分析という前人未踏の領域に踏み出す。そして自衛隊員募集ポスターをジェンダー視点で分析し、さらに生身の女性自衛官や防衛大学校学生への聞き取りへと着実に研究をつみ重ねてゆく。

それらを集大成したのが本書である。軍事組織における男女平等という世界的潮流に違和感を持ちつつ、しかし著者はそれに足を取られることなく冷静に「異例の」軍隊・自衛隊にジェンダーのメスを入れる。ジェンダーの定義としてはポスト構造主義、とりわけジョーン・スコットの「肉体的差異に意味を付与する知」が採用されている。

かつてわたしをクラクラさせた3次元マトリックスは、軍事組織をめぐるジェンダー・イデオロギーの類型として第1章で提示される。軍事組織を容認するか否かでミリタリスト／アンチミリタリスト、権利と義務の平等分配の是非により伝統主義者／平等派の別をたて、これらにさらに性差を個人差に優先するか否かを組み合わせる。その結果、1. ミリタリスト伝統主義者、2. アンチミリタリスト伝統主義者、3. ミリタリスト差異あり平等派、4. アンチミリタリスト差異あり平等派、5. ミリタリスト平等派、6. アンチミリタリスト平等派、7. ミリタリスト実力至上主義者、8. アンチミリタリスト実力至上主義者の8類型が抽出される。

この部分は記号が多いので、かつてのわたし同様一般読者には取っ付きにくいだろう。しかしそれによって、以後の章における分析の枠組みはクリアになり、説得力を増したのはたしかである。ただ歴史を専門とする立場からいえば、「伝統」という言葉を安易に使ってほしくない。ここでいう「伝統主義者」とはジェンダー差別主義者とイコー

ルだが、日本ではジェンダーの多くは近代の産物、つくられた「伝統」にすぎない。

第2章では、自衛隊成立以来のジェンダーをめぐる政策・表象・イデオロギーの変遷が4期にわけて辿られる。まず第1期は1950年、非武装憲法のもとで警察予備隊として誕生してから66年まで。戦前の軍隊と違って女性を導入していたが、看護職のみでイデオロギー類型は「ミリタリスト伝統主義者」。第2期は67年から85年までの一般婦人自衛官採用期。ここで制服に身を固めたWAC(婦人自衛官)が登場する。しかし「女らしい」補助職に限られ、イデオロギーは「ミリタリスト差異あり平等派」である。

一般の国防意識を高める役割が期待されたのもこの期の特徴だという。これについてはわたしも思い当たる。80年代はじめ、わたしは朝霞の陸上自衛隊を訪ねて教育隊長から話を聞いた。彼によれば、高卒女性自衛官は2期4年で結婚退職することが多いが、国防意識をもった子供を育ててくれればそれでいいとのことだった。

第3期は86年から91年の婦人自衛官採用拡大期。この時期は、中曽根政権のもと防衛費がGNP 1%枠を突破、国際的な男女平等の流れとバブル経済による男性の採用難を背景に女性自衛官は倍増する。第4期は92年の防衛大学校の女子への開放以後の幹部自衛官採用期。この時期は幹部登用とともに戦闘部署の一部開放も行われたが、「母性保護」を理由に戦闘機や護衛艦などの開放は見送られた。男性を副操縦士にF15戦闘機を自在に操る「千里眼」の岬二等空尉は、やはりフィクションの世界の話なのだ。

こう見てくると、自衛隊成立以来50余年、女性自衛官は増え職域も拡大したが、それはフェミニズムとは無関係、景気の動向や自衛隊側の都合だったことがわかる。女性登用によって自衛隊イメージのソフト化を図ったり、男女平等の「体面」を国際的に保ったりということだ。ジェンダー・イデオロギーは3、4期においても「ミリタリスト差異あり平等派」のままである。それは自衛官募集ポスターの表象分析によっても見事に裏付けられている。

興味深いのは、2章では戦後平和運動のジェンダー分析も平行して行われていることだ。そこで明らかになるのは、女＝被害者、女＝平和という「差異」イデオロギーの再生産である。それは70年代の第二波フェミニズムによって否定され、「アンチミリタリスト平等派」が目指されたが、第4期において主流をなす戦時性暴力や「基地と女性」問題への取り組みは、再び「すべての女は被害者」として「差異」を構築してしまう危険性があると著者は指摘する。これに対しては異論があるだろう。しかし「軍隊と女性」問題からつねに「軍隊の女性」を無視してきたという著者の批判は重く受け止めるべきだろう。

第3章は、まさにその「軍隊の女性」と向き合った成果である。著者は女性自衛官や防衛大学校女子学生にアンケート調査やヒヤリングを行い、ここではじめて日本の「軍隊の女性」の経験が可視化されることになった。そこで明らかになるのは、自衛隊の支配的イデオロギーを内面化し、自らを二流の戦力と位置づけて「女らしい」貢献に励む女性自衛官の姿である。とりわけ痛ましいのは、「平等」を夢見て防衛大学校に入学した女子学生たちが、学年が進むにつれ自己否定的になっていくことだ。このことは軍隊がとりわけ「男女の肉体的差異に意味を付与しながら男性性を特権化していく」装置であることを如実に示している。しかもたとえセクハラをうけても、国を守る立場の自衛官が被害者になっては存在意義を問われるということで、沈黙を余儀なくされる場合が多いという。

本書を通して明らかになったのは、まずはアメリカのフェミニストたちの戦略がいかに誤っているかということだ。彼女たちは女性の戦闘参加によって男なみの「一流国民化」をめざしたが、結論の章でシンシア・エンローによりながら著者はいう。軍隊はつねに「非フェミニスト的理由」により女性を登用してきた。軍事組織がフェミニストに「敗北」したことなど一度もなかった、と。もちろん一部の女性には「一流の戦力」としての場を明け渡す。しかし、それによって女性の間に分断と対立を生み出しつつ、結局は「男＝一流／女＝二流」の二項対立は維持される。

これは軍事組織だけの問題ではない。一般企業社会においても、一部のプロ化し得る女性とし得ない女性の分断はありふれた光景である。軍事組織はそうした一般社会の女性の位置づけと連動しており、けっして特殊なものではない。したがって軍事組織における女性の困難を見ることは、プロフェッショナリズムが求められる職場の女性の困難を照らし出すものと著者はみる。

そうした地続きの存在として、「軍隊の女性」をみつめた本書の意義は大きい。しかし一方で、それは読者に重い課題を投げかけてもいる。著者の言うように、たしかに「私たちは、今、ここに自衛隊という軍事組織を確かに有しており、その担い手は男性だけではないということ、そして私たちもまた「日本国民として」この組織を支えているという責任を有している」。その組織がさらに強大化しかねないいま、「アンチミリタリスト平等派」を貫くためにはどうあらねばならないのか。

本書によって、この問いが広く共有されることを心から願う。

(かのう・みきよ 敬和学園大学)